

高村 光太郎

たかむら こうたろう

高村光太郎は、明治16（1883）年3月13日、彫刻家・高村光雲の長男として東京に生まれました。欧米留学後、詩人として活躍し、『道程』『智恵子抄』はじめ多数の著作を残しました。昭和31（1956）年4月2日に亡くなりました（妻・智恵子は昭和13（1938）年10月5日に亡くなりました）。

レモン哀歌（『智恵子抄』より）

そんなにもあなたはレモンを待つてゐた
かなしく白くあかるい死の床で
わたしの手からとつた一つのレモンを
あなたのきれいな歯ががりりと噛んだ
トパアズいろの香気が立つ
その数滴の天のものなるレモンの汁は
ぱつとあなたの意識を正常にした

あなたの青く澄んだ眼がかすかに笑ふ

わたしの手を握るあなたの力の健康さよ

あなたの咽喉に嵐はあるが

かういふ命の瀬戸ぎはに

智恵子はもとの智恵子となり

生涯の愛を一瞬にかたむけた

それからひと時

昔山巔でしたやうな深呼吸を一つして

あなたの機関はそれなりに止まった

写真の前に挿した桜の花かげに

すずしく光るレモンを今日も置かう

冬が来た (『道程』より)

きつぱりと冬が来た

八つ手の白い花も消え

公孫樹の木も筭になつた

きりきりともみ込こむやうな冬ふゆが来たき
人ひとにいやがられる冬ふゆ
草木くさきに背そむかれ、虫類むしるいに逃にげられる冬ふゆが来たき

冬ふゆよ

僕ぼくにこ来こい、僕ぼくにこ来こい

僕ぼくは冬ふゆの力ちから、冬ふゆは僕ぼくの餌食えじきだ

しみ透とおれ、つきぬけ

火事かじを出だせ、雪ゆきで埋うめろ

刃物はもののやうな冬ふゆが来たき

【参考資料】

- ・ 『高村光太郎詩集』 (角川春樹事務所)
- ・ 『智恵子抄』 (新潮社)
- ・ 『高村光太郎 (新潮日本文学アルバム 8)』 (新潮社)